

レスチナ人に代償を支払わせる形で、パレスチナの地にユダヤ人の国を創って解決しようなどというのは、政治的に、端的に言って不正 (unjust) であると言いつついます。そして、こんな分割案は採択されたとしても機能しない (unpractical) と断言しました。

パレスチナ分割は、国連憲章違反であり法的に違法、アラブ国家は経済的に持続不可能、政治的には不正——これがアドホック委員会の結論です。ところが、アドホック委員会がこのように結論づけた分割案が、特別委員会で可決され、総会にかけられて、ソ連とアメリカの多数派派工作によって賛成多数で可決されてしまいます。

七十六年後の今、振り返れば、まさにこのアドホック委員会の結論こそ、正しかつたと分かります。こんなことは機能しないとアドホック委員会が断言したとおりになりました。そして、今、第二のジェノサイドが起きてしまった。第二次世界大戦後、発足したばかりの国際連合は、誕生してわずか数年で、自らの憲章の精神を裏切る決議を行ったということです。

「アラブは分割案を受け入れなかった」などと言われますが、アドホック委員会のこの結論を見れば、なぜアラブ人がこんな不正な分割案を受け入れて、自分たちが暮らす土地にヨーロッパのユダヤ人の国を創ることに同意しなければいけないんだと、そう思っただけではないでしょうか。

この分割案が採択されたことに対して、のちにイスラエルの初代首相となるシオニズムの指導者、ベングリオンは何と言ったのでしょうか。

地図上のアラブ国家の部分に住むのはほぼ一〇〇パーセントアラブ人ですが、ユダヤ国家の部分に住むユダヤ人は六〇パーセント程度で、残り四〇パーセントはアラブ人です。

ベングリオンは、「たとえユダヤ国家ができたとしても、ユダヤ人の人口が六割では、安定的かつ強力なユダヤ国家にはならない」と言いました。言い換えれば、安定した強力なユダヤ国家にするためには、ユダヤ国家の領土にいるアラブ人を可能な限り排除しろということです。つまり、民族浄化の教唆です。

## パレスチナを襲った民族浄化——「ナクバ(大災厄)」

国連総会がパレスチナの分割を決議した四七年十一月末から、四八年五月のイスラエルの建国を挟んで四九年の年明けまで、一年以上にわたり、パレスチナの各地で、

パレスチナ人に対する民族浄化の嵐が吹き荒れることになりました。

一九四八年四月九日、エルサレム郊外にあるデイル・ヤーシーンというパレスチナ人の村で、老若男女を問わず村民百人以上が集団虐殺されるという出来事が起きました（女子学生たちは殺される前にレイプされました）。

イルゲン・ツヴァイ・レウミとレヒというユダヤの民兵組織が行った虐殺です。イルゲンのリーダーであるメナヘム・ベギンはのちにイスラエルの首相となり、エジプトのサダト大統領と和平条約を結んだことでノーベル平和賞を受賞することになる人物です。

この事件の直後、虐殺の首謀者たちは事件の隠蔽を図るところか、記者会見を開き、内外の記者に対して、自分たちがアラブ人二百数十人を殺したと、犠牲者の数を倍増して発表します。これがパレスチナにとどまるパレスチナ人の運命だ、というプロパガンダです。事件はパレスチナの内外に一斉に報じられました。この事件後、パレスチナの人々は、ユダヤ軍、イスラエル建国後はイスラエル軍が自分たちの村や町に迫ってきたら、とるものもとりにあえず、着の身着のまま逃げることになります。

虐殺首謀者のプロパガンダもあって、長らくこのデイル・ヤーシーン事件が当時の民族浄化を代表する集団虐殺と思われていたのですが、現在では、パレスチナの各地

でデイル・ヤーシーンを上回るものも含めて、多数の集団虐殺が起きていたことが分かっていきます。

こうして一九四八年、イスラエルはパレスチナ人に対して意図的な、組織的かつ計画的な民族浄化を行いました（ダレト計画）。七十五年前にパレスチナ人を襲ったこの民族浄化、祖国喪失の悲劇を、アラビア語で「ナクバ」と言います。「大いなる災厄」という意味です。

そこにいたら殺される、妻や娘や姉妹がレイプされる、そういう差し迫った恐怖に駆られてみんな逃げたけれども、一旦逃げて国境を越えてしまった者たちは、七十五年経っても、孫どころではなくひ孫、その次の世代になっても、故郷

ナクバ (1948年)



ナクバによって村を追われたパレスチナ人たち 写真：ロイター／アフロ

に還ることができないでいます。

彼らは、安全な状態になつたら戻つてこようと思つていたのです。だから逃げたのです、家の鍵を持つて。もし孫の代になつてすら村に帰つてこれないと分かつていたら、殺されてでも踏みとどまつて闘つていた、と言う人は多いです。

イラン・パペという、イスラエル出身の歴史家が『パレスチナの民族浄化』（法政大学出版局）という本を書いています。彼は反シオニストのユダヤ人です。

パレスチナ人は戦争によって難民になつたのでは決してない、とパペは断言します。アラブ人が多数を占めるパレスチナに、ユダヤ人が圧倒的多数を占めるユダヤ国家を創るとすれば、パレスチナの民族浄化は不可避だった。つまり、シオニズムというプロジェクトには、パレスチナの民族浄化が本質的かつ不可避的にはらまれていたのだということ、この本の中で論証しています。

パペはイスラエルのハイファ大学の教員でしたが、シオニズムを批判する姿勢が問題視され、教授会でパペの大学追放決議がなされます。その時は世界的に反対署名が集められて追放は免れたのですが、家族の命の保証はないというような脅迫が及ぶようになり、イギリスの大学に移りました。彼はイスラエルのユダヤ人として、イスラエルの中から、この植民地主義的侵略によって創られたアパルトヘイト国家イスラエ

ルを変えようとしたが、叶いませんでした。

イスラエルが建国された同一年、一九四八年の十二月十日に、国連総会で世界人権宣言が採択されます。その第十三条第二項には「すべての人は、自国その他の国をも立ち去り、及び自国に帰る権利を有する」と書かれています。つまり、自分たちの国に帰るのは基本的人権だということです。

世界人権宣言が採択された翌日、国連総会は総会決議194号を採択します。その中で、イスラエル建国によつて難民となつたパレスチナ人は、即刻自分たちの故郷に帰る権利がある、帰還を希望しない難民に対しては、イスラエルは彼らが自分たちの故郷に残してきた財産を補償するように、と述べられています。パレスチナ難民が、イスラエルとなつてしまった自分たちの村や町に帰るのは彼らの基本的人権であり、国際社会も認めるパレスチナ人の民族的な権利であるということです。

しかし、パレスチナ難民は七十五年経つても、孫、ひ孫の代になつても、故郷に帰れないでいます。イスラエルが彼らの帰還を現在まで認めていないためです。認めないどころか、イスラエルによる民族浄化は形を変えながら、今日までずっと続いています。ナクバは七十五年前に起きて、終わつてしまった過去の出来事ではなく、今に

至るまで続く現在進行形の事態です。

## イスラエル国内での動き

今までのことをまとめると、ユダヤ国家イスラエルの建国は、レイシズムに基づく植民地主義的な侵略であるということ、そして、パレスチナ人を民族浄化することによって、ユダヤ人によるユダヤ人のためのユダヤ人至上主義国家がパレスチナに創られたということです。その暴力は建国以来、現在に至るまでずっと継続しています。

これはハリウッドで制作されるホロコーストをテーマにした映画ではまったく語られることのない、イスラエルという国についての歴史的事実です。ユダヤ人が祖国を持った結果として、パレスチナ人は第二のユダヤ人、現代のユダヤ人にされてしまったのです。

そして、ヨーロッパ・キリスト教社会における歴史的なユダヤ人差別と、近代の反ユダヤ主義の頂点としてのホロコースト、その責任を負っているはずの西洋諸国は、その責任を、パレスチナ人を犠牲にすることで贖ったということになります。パレス

チナ人に自分たちの歴史的犯罪の代償を払わせ、今に至るまでパレスチナ人に対するイスラエルの犯罪行為をすべて是認することによって、西洋諸国はその歴史的不正をさらに重ねています。

今から七十五年前の一九四八年にパレスチナを襲った民族浄化の暴力、「ナクバ」。今、イスラエルの閣僚や国会議員は、ガザのパレスチナ人に対してもう一度ナクバを味わわせてやると公言しています（アヴィ・デイフテル農相、アリエル・ケレル国会議員など）。ガザからパレスチナ人を完全に民族浄化するという意味です。

イスラエルに、ゾフロット (Zohrot) という NGO があります。ヘブライ語で「彼女たちは記憶している」という意味で、反シオニストの団体です。

シオニズムのナシヨナル・イデオロギーに基づく歴史観では、イスラエル建国は、ユダヤ民族にとって栄光の瞬間です。だから、イスラエルでは、パレスチナ人に対する暴力、民族浄化によって自分たちの国が創られたなどという記憶は徹底的に抑圧されています。そのイスラエルにあつてゾフロットは、自分たちの国がパレスチナ人に対するどのような暴力で創られたのかという、パレスチナ人のナクバの記憶を、イスラエルの国語であるヘブライ語で、イスラエルの歴史の中に記録し、イスラエルのユダヤ人の記憶に刻み込もうという運動をしている人たちです。